

人と戦争のお話の終りに臨みまして私の曾つて實見致しましたお話を致して見たいと思ひます。日露戦争の當時でした。私は弟の出征を送つて品川の停車場に参りました。汽車の窓の方によつて弟と話を居りました時、見るともなく見ると私の直ぐ側に年頃三十歳位の婦人が居りました。服装などは職工の家内位の處に見えました。頭は櫛巻といふ結び方をして、背中に三四歳位の子供を負ぶつて居りました。夫らしい出征軍人と何か語り合つて居りましたが、いざ汽車が出やうとする時、其婦人が夫に暇乞をした挨拶を私は今に忘れる事が出来ません。あちらへ行つたら功名をして

## 發作的に動作する子供

歸つておくれね。子供の世話などは私がするから心配しないでね。」と云ひました。職工風情の細君として其夫の出征を送るにこれほどの詞を以てしやうとは私は殆んど思ひかけませんでした。「功名して歸つておくれ」「子供の世話は私がするから」軍人の妻として之れ以上夫の門出を送る言葉はありませぬ。私は誠に心強く感じました。此詞を以て送られた夫が戦場で卑怯なふるまひは出来なだらうと思ひましたから。それで十年後の今日婦人と戦争についてお話を致しますについてかの殊勝な婦人の態度を新たに思ひ起すので御座います。(文責記者)

文 學 寺 田 精 一

こゝで發作的といふのは、連続的に一貫して居

るといふのでなく、時々或時間を隔て、普通と異つた状態が起るといふ意味である、然し其期間

は大凡一定して居ることもあるが、多くは一定しなくて何か刺戟に接した時に起るのである。又動作といふのは極廣い意味でいふので、普通に用ゐられて居るやうに、何か我事をしやうとして身體を動かす場合は勿論、單に或感情を表現するに過ぎないやうな場合をも、含めて置きたいのである。

幼兒の上に述べたやうな意味の動作は、成人した吾々の眼から見れば、誠に統一のない、調子の整はないものである、けれども幼兒には幼兒らしい色々な動作が、大凡の形を具へて現はれて居るその漠然と輪廓をなして居る動作が、或は自分自らの經驗から、或は他人の模倣から、或は又教育者の助に依つて、次第に普通の人としての動作が、出來上がつて行くのである。而して此の漠然とした動作の輪廓は、個人個人の天性に因つて色々な相違があつて決して一様でなく、又それが普通の人としての動作に出來上がる有様にも、種々異つたところがある。然しながら或種の幼兒に

なると、その動作が普通の現はれ方ではなくて、或時間を隔て、時々特殊な現はれ方をする事がある、これが吾人の問題として居る發作的の動作である。

## 二

今これを解りよくいへば、幼兒の動作に、あることをいふので、それが稀に起るのでなく、其の時其の時の精神や身體の状態から、若しくは何等かの外部から得られた刺戟から、時々起るのである。其の最も著しく現はるゝのは、喜怒哀樂の表情の場合で、例へば普通には左程に喜ばないことも、或時には甚だしく喜び、又普通には全く意に介しないやうな事にも或時には烈しく憤怒の情を起すといふが如きはそれである。かゝる傾向は、幼兒の心身の状態に於ては、或程度まで認められ勝ちのことであるが、その程度の著しく懸け離れて極端なものは、決して普通の心身を有する幼兒とはいはれない。俗に癩の強い子だとい

ふて、不途したことで氣分を害ねると、容易にそれを静めることが出来ないで、身體は反り、手を振り、足を踏んで暴ばれ、甚だしきは顔の筋肉が引き釣つたやうになり、聲が出なくなり、仰向に倒れて、丁度痙攣を起したやうになるのである。

これは極めて著しい場合であるが、かゝる種類の動作は、何時でも起るといふのでなく、時々起るのが常である。或は又氣分が、普通に外部から見ては、何等の理由がないと思はれる時にも、變化し易い幼兒がある。これは上述の場合とは多少趣を異にして感情が動搖し易いのであるが、その起り方の頻繁であることが多い。尤も時には時々起つて、其の他の時には普通と少しも變らないやうな感情の状態を保つものもある。何れにせよ感情の表はれ方が、多少常軌を逸して居る場合である。

次に狭い意味の動作、即ち幼兒の遊戯や日常の行動に於て、上述のやうな發作的の變化のある場

合がある。例へば或時に非常に興味を持つて遊んだことも、他の時には更に何等の注意を惹かない然るに其の後には又以前のやうに著しい興味を持つといふやうな類はそれである。かゝる傾向は成人の吾々にもあることで、仕事にむらのある人といふのは、此の種の性質の人である。或は上のやうに仕事の種類をいふのでなくて、或時には如何なることに臨んでも極めて熱心に行ふけれども、他の時には常には好みそふなことであつても、更にそれに手出しをせず居るやうなこともある。表情の場合と同じやうに、この狭い意味の動作のむらのあることも、幼兒には比較的に見られ勝ちのものであるが、今述べんとするのは、其の程度の著しい場合で、一般の幼兒と明に區別されるやうなのをいふのである。

### 三

いふまでもなく幼兒の精神状態は、あらゆる刺激が新しく相當に強く感ぜられるから、刹那

の事物に注意を惹かされて、精神の活動がそれからそれへと轉じて行き易い、其の結果一つの纏まつた仕事や、落付いた感情の表はれ方の出来難いのは、寧ろ自然の勢である。此の自然の勢を程度以上に越えて、殊に發作的に著しく現はれ来るやうな種類の幼兒は、日常の教育上大に注意を要するのである。

先づ上述したやうな發作的な動作をする幼兒があつたならば、其の幼兒の遺傳關係を究めるのが大切である。何となれば此の種の幼兒は、偶然に生じたのではなくて、其の多くは悪い遺傳的素質を有して居るからである。此の悪い遺傳的素質といふのは、多くは腦神經病に關係を有するもので主に直系たる兩親のヒステリー、癲癇、酒精中毒梅毒等の影響から得られたもので、時には傍系たる近親者の腦神經病に關係して居ることもある。

かゝる不幸な幼兒には精神上に色々な異常のある外に、身體上に種々な徴候のあることがある。

例へば體質が生來纖弱であつて發育が良くなかつたり、時々痙攣があつたり、些細な病氣や刺戟にも強い影響を受けたり、或は生れながらに不具や畸形を有して居ることも少くない。それから精神上で普通に見られるものは、感動性が強く、夢に驚かされ又寐言をいふこと多く、又時々幻を見るやうな状態になつたり、何の目的もなく歩き回つたり、特別な變つた癖を有することなどが少くない、所謂變り者と見らるゝことが多い。癖の中には瓦を噛つたり、炭を食べたり、砂を口にしたり、或は昆蟲類や爬蟲類を好んで食べるなどがある。これ等の癖のあるものは、俗に蟲持ちとか癪性だとかいはれて居るが、爪を噛んだり、些細なことを氣にする一種の潔癖なども、亦此の中に包含せしむべきものである。

かの如く、發作的に動作する幼兒は、悪い遺傳的素質を有して居るものが大多數であるから、其の兩親や近親の心身の狀態を觀察して、果して遺

傳的のものであるかどうかを定めねばならない。

何となればかゝる性質の幼児は、時には熱病、腦膜炎、外傷等の關係から、何等の遺傳的關係がなく、起ることがあるからである。のみならず幼児の周圍にある人々並に事物の状態が、幼児を刺戟すること餘りに甚だしい爲めに、一時的にかゝる變態を呈するに至つたものも亦あるからである

#### 四

然らばかゝる異常兒に對しては、如何なる處遇をなしてよいか。固より醫師の精密な診斷を受ける必要のあるのは明なことであるが、教育者の立場としては、先づ特別な原因から來て居る一時的のもの、遺傳的素因から來て居る比較的全治し難いものを見分けることが肝要であつて、これは幼児の日常の廣い意味の動作を注意深く觀察する外途がない。

若し教育者に於て、自分の手に掛けて居る幼児の中に、著しい發作的な動作をするものがあつた

ならば、其の原因の何たるを問はず、先づその幼児の周圍の人物と事物との觀察をして若しその悪い傾向を助長するやうなものがあつたならば、これを取除くことに努めねばならない。尤も此の悪い傾向を助長せしむるものは色々あるが、強い複雑な刺戟、營養状態の不良、住居其の他の不衛生状態疾病關係等が其の主なるものである。又幼稚園や學校に居るものであれば、學科の過重なりや否や、賞罰、遊戯の仕方、他の幼児との關係等を十分に懇切に注意して、出來る丈け其の精神を刺戟せしめないやうに努める必要がある。又家庭に於ては空氣のよい地への轉居、食物の撰擇、衣服寢具、周圍の靜肅清潔並に適度の運動、疾病、睡眠等に對する注意の肝要なのはいふまでもなく賞罰、交友、讀物、見物、談話等の注意も決して忽にしてはならない。

かくて出來る丈け、精神を安靜に保たしめ適度なる刺戟に接せしめ、感情の動搖を避けしむるや

う努めねばならない。而して此の種の幼児に就いて特に注意して置くべきは、思春期の頃に至つてこれが著しく昂進して、遂には全く救ふべからざる精神の變態者となることが往々ある一事である。殊にかゝる傾向は、直系たる祖父母及び兩親腦神經病酒精中毒、梅毒等があつて、其の爲めに上述したやうな發作的な變態な動作をして居つたもの

『トブシイ』(二)

文學に現はれたる子供(三十五)

此の白々しい虚言にオフヒリヤは憤然として、トブシイを掴んで烈しく揺ぶつた。「そんな虚言を二度と御言ひでない。」と揺ぶる拍子に今一方の袖から手袋が落ちた。

「さあ如何だ！これでも、リボンを盗みはしない

に、最も多く見られるのである。従て幼児期や少年期が忠實に觀察されてなかつた時には、恰も思春期になつて突發的に、且不治なる程度に於て、發病したやうに觀られることが少くない。これをも以ても幼児期に於ける此の種の傾向の觀察並に適當なる處遇は、最も肝要なことである。(終)

岡田みつ

と言ふのかい。」とオフヒリヤは言つた。

トブシイは手袋の事は白狀したが、リボンの方はやはり強情を張つて盗みはせぬと言つた。

「では、トブシイもし御前がリボンと手袋の事を皆正直に話して終へば、今日は打擲しないで置い